

藤田 金一（ふじた・きんいち）

1、プロフィール

昭和初年代、詩誌「獵騎兵」・「北」、「座標」、「東奥日報」などに詩・訳詩・詩評を發表し、県詩壇の芸術派の中心的詩人として創作活動をした。

<生没>

1908(明治 41)年3月 17 日 ~ 1972(昭和 47)年2月 17 日

<代表作>

詩集『白い焰』

<青森との関わり>

青森市に生まれる。青森師範学校卒業。小学校教員になり、東奥日報社記者に就く。昭和 14 年まで青森市に住む。

2、作家解説

詩人。明治 41 年3月、青森市松森町に生まれる。県立青森中学校在学中、北村透谷から刺激を受け、永遠なるものを考えるようになる。青森市の天主公会コルニエ神父を訪ね、教会に止宿し、フランス語を学び、入信する。大正 15 年県立青森師範学校本科二部を卒業、青森市立橋本小学校教員となる。この頃三富朽葉らの影響を受け、本格的に詩作を始めた。昭和3年6月、詩誌「獵騎兵」を創刊編集する。青森中学校の関係者を中心にして柿崎守忠・高木恭造らが同人として参加した。4号から太宰治も加わった。同年 12 月、板柳町から発行された詩誌「信号燈」に、詩・訳詩を發表。翌4年末、県下文芸総合雑誌「座標」に参加するため「獵騎兵」を終刊。この年、ボオドレエル『悪の華』を全訳する。翌5年1月「座標」創刊、詩壇編集者になる。詩・ボオドレエルの訳詩を「座標」に發表。2月、詩集『白い焰』刊行。翌6年1月、「座標」の左傾化に反発して、一戸謙三、三上斎太郎らと「座標」を脱退する。3月詩誌「北」(第一次)を編集発行する。同人は一戸謙三・三上斎太郎・高木恭造ら 11 人であった。10 月、高木恭造の津軽方言詩

集『まるめろ』を「北」編輯所より編輯発行する。翌7年、教員を辞め、東奥日報社に入り、記者となる。翌8年、詩誌「北」(第一次)、詩誌「府」に同人として参加する。この頃より詩作から遠ざかっていく。

昭和13年、従軍記者として、北支那に派遣される。翌14年、東奥日報社を退社し、家族とともに天津に移住、敗戦まで、北京、青島と転住。昭和21年、中国から引き揚げ、以後東京に居住する。昭和42年、旧詩作品に手を加え、『藤田金一詩集』と題して刊行する意図のもとに草稿をまとめる。この未刊詩集は、『青森県詩集 上巻』(昭和50年)に収録されている。昭和47年2月17日、東京都港区において、63歳で死去。詩人としての活動は、ほぼ10年の短期間であったが、フランス象徴派風の抒情詩は、異彩を放っている。

3、資料紹介

○『白い焰』

図書

1930(昭和5)年2月5日

182mm×121mm(四六判)

詩集。昭和5年2月5日発行。発行所新興書房。大正15年から昭和4年までの詩50篇収録。集中の「著者に就いて」で<詩作生活の一つの清算として『白い焰』を上梓>と詩集発行の動機を記している。藤田の前半の詩業が概観できる。